

# 対馬市における 写真ワークショップと地域創生

野田 研一

本企画の目的は、長崎県対馬地域の地域創生事業の一環として、写真ワークショップを開催し、主に現象学的地理学において展開されている場所論（イーファー・トゥアン、エドワード・レルフほか）の観点から、当該地域の場所性/没場所性、空間性、場所のアイデンティティ、景観/風景、場所の感覚等の構成要素と組成を定性的に調査・分析することにある<sup>(1)</sup>。同時に、ワークショップという性格上、純然たる調査というよりも、地域参加者を積極的に募り、「地域の目」と「外部の目」を比較対照しながら、そこにどのような場所意識があり、具体的にどのような空間の分節化が実践されているかを共同作業として探る試みでもある。したがって、場所論的な見地あるいは写真論的な見地からの講義や討論などの積み上げもまた予定している。（詳細は資料①〈pp. 42-43〉を参照されたい。）

本プロジェクトが依拠する場所論は、「現象学的」地理学であるため、定量的な方法とはまったく異なる方法意識に貫かれている。たとえば、トポフィリア（場所愛）という概念を提起したアメリカの地理学者イーファー・トゥアンは、この概念が「物質的環境と人間との情緒的なつながりをすべて含む」（179）ものと定義している。本企画が「定性的」であるゆえんは、この場所に対する「情緒的なつながり」（同前）、「情緒と場所」（215）の関係をめぐる問題意識が前提となるからである。

理論的には、たとえばエドワード・レルフ『場所の現象学：没場所性を越えて』によれば、この問題は以下のように整理される。

「私たちは、多様かつ奥深い「場所」に分節された世界の中で生活し、活動し、自らの位置を見定めているけれども、そうした場所の成り立ちと私たちがそれらを経験するしかたについては乏しい知識しか持ちあわせていない。」（37）

「場所について整理された知識がないということは、現実には問題である。もしも場所が世界における人間存在の基本的な側面ならば、またそれが個人や人間集団の安全性やアイデンティティの源泉ならば、意義ある場所を経験し創造し守っていくための手段を見失わないようにすることが重要である。」

「それゆえ、場所と私たちの場所経験の特徴と本質が何であるかを知ることが重要であろう。なぜなら、そのような知識なしでは、私たちの生活の重要な背景である場所を創造し、守ることはできないと思われるからである。

以上を踏まえ、本企画の理論的ポイントは以下ようになる。

---

<sup>(1)</sup> 定量的な調査ではないことは、本プロジェクトの内容からして当然であるが、予め明確にしておきたい。

- (1) 「場所」として「分節された世界」の様相を把握する。
- (2) 「場所経験」の様相を把握する。⇒ 場所経験の特徴と本質とは何か。
- (3) 「意義ある場所」とは何か。それを経験し、創造し、守るとはどういうことか。
- (4) 人間存在の基本的な側面としての「場所」はどのように存在し、現象しているか。
- (5) アイデンティティの源泉としての「場所」とはどのような事態であるか。

これらの視点から、対馬地域の「場所性」の現状、様態、機能、創造、保護のありかた、すなわち当該地域が「場所」としていかに「分節」され、地域と住民のアイデンティティとどのように結節しているかを調査・分析する。とりわけ、レルフの議論に含まれる「場所性」と「没場所性」（生きている場所と死んでいる場所）の範疇化を基軸として、地域の場所論的構造を観察する。

こうした観察・分析へのアプローチに、本企画では写真というメディアを活用する。つまり場所論とはいえ、写真メディアを活用するということは、基本的に「景観」(view)としての場所を把握することにある意味では限定される。特定の場所・空間がどのような要素によって組成され、機能しているかを景観の観点から探ることである。場所・空間は日常生活から、たとえば観光的な場所まで幅広く存在する。凡庸から特殊化にまで及ぶ多義的な景観のレンジ、すなわち「分節化」の様態を要素、組成、機能を中心として所定の「景観構造」として調査・分析することにより、いわば地域の構造分析および地域振興のための再定義までを検討する。

さらに付け加えるならば、とりわけイーファー・トゥアンやエドワード・レルフの現象学的地理学の理論的な中心にあるのは、空間(space)と場所(place)の弁別である。空間とは、基本的にデカルト以降の均質空間を意味し、それに対する人間の関与の有無は考慮の対象とされない。他方、場所とは、人間によって「生きられた」空間、経験の対象としての空間を意味し、人間の関与性を前提とする概念となっている。したがって、場所の概念にはかならず「場所の感覚」(sense of place)が含まれている。場所概念が内包するのは、「知覚上のまとまり」(32)であり、「直接経験と意識」(33)であり、「人間が自らの存在を了解するための手段」(35)であり、「実存的あるいは生きられた空間」(42)、「アイデンティティの源泉」(37)として説明されている。

したがって、先に述べたように、「地域の場所論的構造」を観察しようとする場合、要約的に「場所の感覚」という経験的側面こそがその具体的・実践的な対応物となる。換言すれば、写真というメディアを介して、多様に「分節化」された景観を所定の構造を有するものとして把握することは、その地域における「場所の感覚」のありかたを探ることであり、延いては「地域」として概括される「自然および文化的諸要素の統合体」(30)の「分節化」の実態を把握することに繋がるものである。

なお、本年度は本ワークショップの初年度として、やや試行的にワークショップをしたが、次年度以降も継続的に開催地を変えて、地域の協力を得ながら実施し、調査方法やプログラム展開の精度をさらに向上させていく予定である。

(のだ・けんいち 立教大学名誉教授／同 ESD 研究所運営委員)